



▶ 学年 小学校 第2学年

▶ 主題 「あたたかい気持ち」 B-6 親切、思いやり

(「とくべつな たからもの」 光文書院「小学 どうとく ゆたかなこころ 2年」)

POINT
01

対話的な学びを引き出す教師の仕掛け

本教材文は、穴に落ちて困っているねずみの子に出会ったくまが、かばんの中の自分が拾い集めた宝物を捨て、かばんにねずみの子を入れて助け出すという物語である。物語終末には、「ありがとう」と言って一つだけ残ったどんぐりを手渡すねずみの子と、そのどんぐりを見つめるくまの様子が描かれている。

教師は、導入において子どもたち自身が大切にしている宝物について問うことで、子どもたちがかばんに入ったどんぐりを捨てる場面でのくまの葛藤や決心について想像したり、「自分だったら…」と登場人物と自分とを重ねて考えたりと、自身と向き合うことができるようにした。

POINT
02

対話的な学びの様子

◎ 宝物を捨てる決心をした時のくまの気持ちを考える。

教師「かばんの中の『たからもの』を捨てようと思った時、くまくんはどのような気持ちだったのでしょうか。」

児童A「どうしてもねずみの子を助けたいという気持ちだと思う。」

児童B「宝物は大事なんだけど、ねずみの子は穴の中で泣いていてとても困っているのが分かったんだと思うよ。」

児童C「**本当は、宝物を捨てたくないんだけど、**ねずみの子を助けたい気持ちの方が大きくなったんじゃないかな。」

教師「Cさんは、どうしてそのように考えたのですか。」

児童C「**僕だったら、宝物はとっても大事だから、なかなか捨てられない**と思う。でも、どんぐりはまた拾えばいいし、助けられるのは自分しかいないと思って、捨てるのを決めたと思う。」

児童D「私も、全部捨てるのは嫌だな。**それまでずっと集めてきたものだったら捨てられないかもしれない。**だから、**くまくんはきつと目をつぶって、思い切って捨てた**と思う。」



葛藤する気持ちを対比的に示す板書(部分)

「授業改善グランドデザイン」との関連

子どもが登場人物と重ねながら自分自身のことを考えることができるよう、導入を工夫する。また、考えた理由について問い返すことで、一人一人が自己を見つめる学び合いにすることが大切である。

◎ これまでの生活を振り返り、困っている人に親切にした時の気持ちを考える。

教師「これまでに、困っている人に親切にしたことはありますか。」

児童E「手洗い場に落ちていたハンカチに、1年生の名前が書いてあったから届けたことがあるよ。」

教師「その時は、どんな気持ちでしたか。」

児童E「**ちょっと恥ずかしかったけど、『ありがとう』って言われてうれしかった。**」

児童F「僕だったら、1年生の教室に行けるかな…。でも、やってみようかな。」

教師「Fさんは、どうしてやってみようと思ったのですか。」

児童F「この前、おばあちゃんと買い物に行った時に荷物を持ってあげたんです。そうしたら**とても喜んでくれて、僕もうれしくなりました。**だから、Eさんみたいに他の人にも親切にしようと思いました。」

POINT
03

学びが深まった児童の姿

教師は、登場人物の気持ちに共感しながらも、「本当は宝物を捨てたくないんだけど…」と自分の本音を話す子どもの言葉に着目し、どうしてそのように考えたか問い返した。そのことにより、困っている人を助ける「親切、思いやり」が大切であると分かってはいても、様々な状況によって迷ったり、できなかったりすることもあるという困難さも含めた価値理解と人間理解を深めることができた。

また、困っている人に親切にした時の自分の気持ちを問うことで、相手のことを考えて親切にできた時のあたたかい気持ちについて共感し、道徳的な心情を育てることができるようにした。